

富山医科薬科大学
医学部同窓会報

2000.第9号



富山医科薬科大学
医学部同窓会報

2000.第9号



C O N T E N T S

4. 大学改革に対する本学の取り組み
—ご挨拶に代えて— 副学長 本田 昂
6. 柳河初訪 会長 高田 良久 (医学科 昭和57年卒)
9. 特集 “卒業生の今現在、そして将来” Part 4.
風間 泰蔵 (医学科 昭和57年卒)
松田 治己 (医学科 昭和57年卒)
宮際 幹 (医学科 昭和57年卒)
山谷 和正 (医学科 昭和57年卒)
前田 基一 (医学科 昭和58年卒)
谷井 靖之 (医学科 昭和60年卒)
16. 中谷先生教授就任
富山医薬大卒業から金沢大保健学科の
教授に就任するまで
金沢大学医学部保健学科基礎看護学教授
中谷 壽男 (医学科 昭和58年卒)
中谷壽男先生の教授就任を祝して
第1解剖学助教授 森沢 佐歳
中谷壽男先生の教授就任を祝して
町立堀之内病院外科 勝山 新弥 (医学科 昭和57年卒)
21. 特集：大学内教室紹介
第1内科教室 浦風 雅春 (医学科 昭和58年卒)
耳鼻咽喉科教室 安村佐都紀 (医学科 昭和62年卒)
第2生理学教室の現在 永福 智志 (医学科 平成2年卒)
明るい法医学教室 島田 一郎 (医学科 昭和58年卒)
基礎看護学教室 小澤 明子 (看護科 平成10年卒)
小児看護学教室 飯室美知子 (看護科 平成9年卒)
23. ホームページ開設にあたって
耳鼻咽喉科 高田 訓 (医学科 平成5年卒)
30. 〈定年退官寄稿〉三つのウイニングボール
麻酔科学教授 伊藤 祐輔
-

「ひととき」

ロウケツ染

染色工芸家。太平洋美術会賞受賞。各地工芸画廊をはじめ、1992年より日本橋高島屋(東京)で個展を開き好評を博す。栃木 [蔵の街] 音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。栃木県岩舟町在住。

-
32. 定年退官 臨床検査医学教授 櫻川 信男
34. 平成11年度富山医科薬科大学
関連病院長懇談会議事要旨
37. 富山医科薬科大学から関連病院への常勤医師
派遣数
39. 同期会報告 免疫学 長田 拓哉 (医学科 平成3年卒)
40. 訃報
上田 剛君のご逝去を悼む
整形外科 石原 裕和 (医学科 昭和60年卒)
亡き植田鉄也氏を偲ぶ
耳鼻咽喉科 高田 訓 (医学科 平成5年卒)
42. 第51回 西日本医科学学生総合体育大会部門別成績
43. 平成11年度 第18回医学部同窓会総会議事録
46. 平成11年度会計報告・平成12年度収支予算案
平成11年度行事報告・平成12年度行事予定
48. 職掌分担・評議員一覧
50. 富山医科薬科大学医学部人事消息
51. 短信
53. 原稿募集
54. 編集後記

● 会計からのお知らせ・会費未納者一覧

大学改革に対する 本学の取り組み

— ご挨拶に代えて —

富山医科薬科大学

副学長 本田 昂



同窓会の皆様におかれましては益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。皆様が本学を立派に巣立ちになられ、各界でご活躍されていますことは本学が誇る財産であり、私ども教職員の無上の喜びでもあります。それぞれの道で引き続き精進を重ねていただきたいと存じます。

さて、すでにご承知の通り、昨今、大学改革を巡る動きが活発になっております。皆様の母校・富山医科薬科大学もその例外ではなく、高久学長の下、鋭意取り組んでいるところです。すでに10年近く前から大学設置基準の大綱化・弾力化などの諸規制が緩和され、昨年10月の大学審議会の答申におきましては、教育研究のシステムの柔構造化や多面的な評価システムの構築も謳われましたが、昨今の論議は大学改革の速度をさらに速め、より一層の個性化、効率化を促すものとなっております。

そもそも今次の改革論議は、一連の行政改革の延長線上にあるものです。政府はこれまでも臨調や行革審議等の答申に基づいて行政組織のスリム化や効率化を図ってまいりましたが、国家財政の逼迫

と相まって、今や抜本的な行政改革は最重要課題に位置づけられております。いわゆる独立行政法人化（独法化）をめぐる議論も、こうした流れから派生したものです。従来、国立大学は必ずしも直接的な形で行政改革の対象とはされてきませんでした。中央省庁等改革基本法などの法令や方針では、もはや国立大学も行政改革の対象外ではない、つまり例外扱いされないことが鮮明になっております。

このため、去る8月、文部省は国立大学の独法化に関する基本的な考え方をまとめ、公表いたしました。依然として国立大学協会の考え方との間に乖離があり、また関係機関との調整も残されておりますため、最終的にどのような形になるかは明らかではありません。しかし、近い将来、国立大学が何らかの形で大変革を迫られますことは確かなところ。大学といたしましても、国立大学の特殊性や存在の重要性に鑑み、教育研究機関としての国立大学の果たすべき本来の機能、そして自主性・自立性が今後も十二分に担保されるよう、他の大学等と共同歩調をとりながら強く主張していかなくてはならないと考えております。

しかし、独法化の動きの有無にかかわらず、本学を含めた国立大学が早急に21世紀におけるアイデンティティーとレゾナードルを明確にし、抜本的な大学改革に取り組まなければならないことには変わりはありません。

ご存知の通り、本学は昭和50年の開学以来、「医薬一体の総合治療学」と「東西医薬学の融合」を理念に、皆様のような立派な医療人を育成して参りました。この理念そのものは大いに評価されてきたところではありますが、将来を見据えた基本構想や制度設計を、個性化や活性化、重点化、効率化といった観点を加味して今一度行うことが必要とされているわけです。このためにも、本学では本学に課せられております時代の要請や役割、そして望ましい「本学の将来像」に関します議論を開始し、対応が後手に回らないよう準備を重ねております。

勿論、改革とは一朝一夕に成し遂げられるものではありません。しかし、本学を含めました国立大学は今、大きな岐路に立たされております。残念ながら、こうした懸念は杞憂には終わりそうにありません。このため、学長のリーダーシップの下、教職員が一丸となってこの難局を乗り切りたいと願っておりますが、同窓会の皆様におかれましても、どうか学びし母校の行く末を案じ、機会があれば是非とも知恵を提供していただきますようお願い申し上げます。

最後ではございますが、皆様のご健勝とご多幸、そして益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

(平成11年10月16日 記)

柳河初訪

会長 高田良久



▲川下り乗船場 懐月楼「立秋」詩碑にて

二十数年来念願の柳川を初めて訪れた。

もうし、もうし、柳河じゃ、

柳河じゃ。

かね
銅の鳥居を見やしゃんせ。

欄干橋を見やしゃんせ。

と、混声合唱団の諸君がよく歌っている筑後柳川である。

川下りの小舟から「南蛮櫓」や「ざぼん」などの南国の木々を見上げ、古い石垣や武家の広大な邸宅地がそのままに残っているのを見ると、掘割や水を介して昔につながっていく思いがする。あるいは、船頭が語る旧柳河藩主立花家と皇太后や肥後の細川家、仙台伊達家との姻戚の話になおさらそんな思いが強まったのかも知れない。

柳河を知ったのは「廃市」の扉書きである。福岡県生まれの小説家福永武彦の手になるこの中篇小説は昭和40年代には結構ファンがいた。私も通信添削の会報か何かで知って、ありがちな競争心から早速読んでみたことを思い出す。東京で働く主人公が、水郷の町の大火の報に接し、学生時代の一夏をその町に過ごした回想を綴る形で物語は展開する。オペラで言えば「ラ・ボエーム」のような甘さうずと疼き、帰らぬ日々への感傷を描いた佳品といったところか。

福永氏は小説のモデルが柳川であるとは言っていない。むしろnowhereとして読んでほしいと言っている。確かに筑後平野も有明海に近い柳川と小説の舞台では、山の近さに違いがある。氏が、小説の舞台を山に近づけたのは、心の内

向をよく反映させようとの趣向に違いない。そう考えると、筑後柳川の海の外向に連なるイメージを排し、nowhereとする作者の願いに頷けるものはある。しかし、扉に記された「さながら水に浮いた灰色の柩である」の一文が、他ならぬ柳河に生まれた北原白秋の第2詩集「思ひ出」の序「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一つである」(2節1段)の終文であることを知ると、読者は柳川と作品の関係に無関心ではいられない。

船着き場近くの白秋の生家で面白いものを見つけた。柳河の都市計画に対する白秋の自筆原稿である。係員に尋ねたところ、熊本出版文化会館発行の『北原白秋の都市計画論』(新藤東洋男著、創流出版発売)でその全文を読むことができるという。早速注文するつもりである。詩人の都市計画がどういうものか興味深い。

白秋のふるさとへの思慕は直だ。「柳河こそわが産土^{うぶすな}」と詠ずる愛情が氏のロマンのためか、柳河の風土人情のなせる技かは詳らかではない。しかし、郷土に入れられず、不遇に去った偉人とは違う、熱い、直な思いが幸く清々しい。

一昨年(1998年)10月、「聴衆がつくる地域文化」をテーマに、第9回全国音楽祭サミットが栃木市で開催された。その際、先進的な事例として芸術文化都市建設に邁進する富山市企画管理部文化振興室の宮崎茂氏の御講演を頂いた。また、昨年(1999年)9月の栃木県糖尿病教育担当者セミナーにおけるシンポジウム「地域・職域での糖尿病への取り組み」には、小林正教授の御尽力により富山県厚生部健康課の守田万寿夫氏の御講演を頂けた。

「富山こそわが産土」である。

柳河に生まれ、伝習館に学んだ者が全て詩人



◀沖の端 白秋生家にて



御花 松濤園にて▶

とはならなかったように、富山医科薬科大学に学んだ者が全て富山を産土と思うわけではないかも知れない。しかし、栃木に暮らしてますます思う生まれ故郷ではない富山への思慕は、荷風のフランスではなく、白秋の柳河と同じ性格のものだと私は思っている。

○藩主の邸宅「御花」で昼食。名物「鰻のせいり蒸し」は、関東のようにご飯にタレをかけるのではなく味付きのご飯が蒸してある。口底とは何かと思えば、フランス料理で言う舌平目である。何とか言う貝、赤貝の刺身の美味、有明海の豊饒を感じる食膳だった。

○それにしても御花は広大な屋敷である。慶應義塾大学の櫻田淳氏は「富裕階級」を適正に復活させて「その経綸、関心、あるいは趣味に基づいて、学術助成、芸術振興、慈善活動、あるいは地域の社会資本整備といった公益事業を通じて、社会に対する『富の還流』を行うよう期待」する旨発言された。確かに、国民一人一人が自家用車を持つようになったからといって、広大な駐車場はできても、このような趣味のよい邸宅や庭園は造営されないかも知れない。伊達家から輿入れした姫君のために、松島を模したという松濤園を、白秋の時代と同じ座敷から眺めながら「国家や地方自治体による『富の還流』は結局のところ『無難にして顔の見えない』ものになりやすい」という氏の主張を思い返した。

子供の入浴が待っている。14:30福岡空港発 全日空ポケモンジェットに間に合わすべく、御

花に呼んだタクシーで西鉄柳川駅に向かった。

道路からみる柳川は何の変哲もない小都市に過ぎない。あっけないほどだ。川下りの舟で感じた豊饒とタクシーの車窓からみる索漠の何たる相違。舟の速度と車の速度、舟の視点と車の視点、その速さの違い、高さの違いがもたらす情趣の慄然たるまでの相違。それは、東京ディズニーランドのジャングルクルーズと、柳川の川下りの違いをも含む現代の陥穽であろう。

時代や文明が我々を押し去ったところに何が開けたか…。

難しい世の中になったものである。

余談だが、白秋は糖尿病だったそうだ。52歳で眼底出血、57歳呼吸困難に陥り永眠とある。帰去来の「^し盲ふるに、^は早やもこの目」「飛ばまし、今一度」に無念や切望が滲むのはそのためかもしれない。

第1回医薬大祭記念講演会に御来演いただいた江藤淳先生が去る7月21日お亡くなりになった。

『腰折れの話』（平成6年刊）で先生は、「生命の氾濫するこの五月、六月という季節は、ひよっとすると自分の生命にとってはむしろ危険な季節なのかも知れない」（ギックリ腰と俳味）と書かれた。

予言のように1999年6月、軽い脳梗塞に倒られた先生は7月、御自身を「形骸に過ぎず」と断じられ、「自ら処決」された。

その是非は問うまい。

先生の御遺徳を偲び、静かに御冥福をお祈りしたい。